

詩篇107篇

《帰還民の再会》

- 1 「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」
- 2 主に贖われた者はこのように言え。主は彼らを敵の手から贖い、
- 3 彼らを国々から、東から、西から、北から、南から、集められた。

《旅人の救出》

- 4 彼らは荒野や荒れ地をさまよひ、住むべき町へ行く道を見つけなかった。
- 5 飢えと渇きに彼らのたましいは衰え果てた。
- 6 この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。
- 7 また彼らをまっすぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。
- 8 彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。
- 9 まことに主は渇いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。

《囚人の釈放》

- 10 やみと死の陰に座す者、悩みと鉄のかせとに縛られている者、
- 11 彼らは、神のこぼに逆らい、いと高き方のさとしを侮ったのである。
- 12 それゆえ主は苦役をもって彼らの心を低くされた。彼らはよろけたが、だれも助けなかった。
- 13 この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。
- 14 主は彼らをやみと死の陰から連れ出し、彼らのかせを打ち砕かれた。
- 15 彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。
- 16 まことに主は青銅のとびらを打ち砕き、鉄のかんぬきを粉々に砕かれた。

《病人の回復》

- 17 愚か者は、自分のそむきの道のため、また、その咎のために悩んだ。
- 18 彼らのたましいは、あらゆる食物を忌みきらい、彼らは死の門にまで着いていた。
- 19 この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。
- 20 主はみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴から彼らを助け出された。
- 21 彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。
- 22 彼らは、感謝のいけにえをささげ、喜び叫びながら主のみわざを語れ。

《舟人の救出》

- 23 船に乗って海に出る者、大海であきないする者、
- 24 彼らは主のみわざを見、深い海でその奇しいわざを見た。
- 25 主が命じてあらしを起こすと、風が波を高くした。
- 26 彼らは天に上り、深みに下り、そのたましいはみじめにも、溶け去った。
- 27 彼らは酔った人のようによろめき、ふらついて分別が乱れた。

28 この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から連れ出された。

29 主があらしを静めると、波はないだ。

30 波がないので彼らは喜んだ。そして主は、彼らをその望む港に導かれた。

31 彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。

32 また、主を民の集会であがめ、長老たちの座で、主を賛美せよ。

《神の摂理》

33 主は川を荒野に、水のわき上がる所を潤いのない地に、

34 肥沃な地を不毛の地に変えられる。その住民の悪のために。

35 主は荒野を水のある沢に、砂漠の地を水のわき上がる所に変え、

36 そこに飢えた者を住ませる。彼らは住むべき町を堅く建て、

37 畑に種を蒔き、ぶどう畑を作り、豊かな実りを得る。

38 主が祝福されると、彼らは大いにふえ、主はその家畜を減らされない。

39 彼らが、しいたげとわざわいと悲しみによって、数が減り、またうなだれるとき、

40 主は君主たちをさげすみ、道なき荒れ地に彼らをさまよわせる。

41 しかし、貧しい者を悩みから高く上げ、その一族を羊の群れのようにされる。

42 直ぐな人はそれを見て喜び、不正な者はすべてその口を閉じる。

《結論》

43 知恵のある者はだれか。その者はこれらのことに心を留め、主の恵みを悟れ。

長い期間学んできた詩篇も、いよいよ最終巻である第五巻（107～150篇）に入りました。各巻のイメージが以下のようにまとめられているのが参考になります（小畑）。

第一巻：少年の快活

第二巻：青年の懊悩

第三巻：壮年の憤怒

第四巻：老年の悲嘆

第五巻：再び盛り返す力

これによると、150篇まである詩篇がまるで一人の人の人生のように誕生から老齢期まで、そして復活の力を得て終えていくかのようです。主にあってはその人生が死で終わるのではないことを物語っているのでしょう。

本篇には大きく三つの特徴が見られます。

- ① 主による解放が「旅人」「囚人」「病人」「舟人」の四種の人々の救出で表されている
- ② 四つの救出のいずれにも「苦しみの叫びへの応答」がある
- ③ 四つの救出のいずれに対しても「感謝の呼びかけ」がある

今日はこれらの特徴を軸にまとめてみましょう。

1～3節は「序言」ですが、冒頭には③のポイントである「感謝の呼びかけ」がまず置かれています。「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」。この呼びかけによって本篇は開幕するのです。105篇、106篇と同じく「ホードゥ（感謝せよ）詩篇」と呼ばれます。

この序言の中で「贖われた者」「東から、西から、北から、南から、集められた」という表現が出てくることから、本篇の背景にバビロン捕囚からの奇跡的な解放の経験があることはほぼ間違いないでしょう。捕囚によって故郷を追われていた民が再び集まってくるのです。そこで再会を喜び合い、共に感謝の歌声を挙げる。そのような涙の情景であります。

① 主による解放が「旅人」「囚人」「病人」「舟人」の四種の人の救出で表されている

(1) 旅人の救出（4～9節）

ここでは捕囚の苦悩が、行く当てのない「旅」に譬えられていると思われます。この旅には終わりが見えず、故郷から引き離され、異国の地で延々と働かされている。「飢えと渇き」は「心の枯渇」を比喩的に表しているのでしょうか。かつて足繁く通った神殿での礼拝において主とお会いすることができない。郷愁と虚無に、彼らの「たましいは衰え果てた」のです。

(2) 囚人の解放（10～16節）

捕囚の苦しみ「死の陰」「悩み」「鉄のかせ」という詩的表現で表されています。預言者たちは、民の不従順の結果として捕囚という出来事が起きると異口同音に語っていました。「彼らは、神のことばに逆らい、いと高き方のさとしを侮った」「それゆえ主は苦役をもって彼らの心を低くされた」と。旧約聖書においては、アッシリヤ捕囚もバビロン捕囚も、単なる侵略戦争ではなく、神との関わりにおいて起きたことと捉えられたのです。

(3) 病人の回復（17～22節）

ここでも、捕囚が「病」に譬えられています。「彼らのたましいは、あらゆる食物を忌みきらい、彼らは死の門にまで着いていた」（18節）とは、おそらく、異教の地でユダヤ人が食べてはならない食べ物が強いられ、それらを拒んだ結果、痩せ衰え、死ぬ寸前まで行ったということの意味するのでしょうか。

(4) 舟人の救出（23～32節）

捕囚からの解放の兆しが見え始めているのでしょうか。捕囚民の中には、貿易船に乗って商業に従事する者もいたのかもしれませんが。捕囚後期には、ユダの民は異教の地で繁栄し始めていたのです。しかし、彼らが繰り出す大海原は常に難破する危険と背中合わせであり、嵐に見舞われて命を落とす危険性がありました。そのときの恐怖が語られているのでしょうか。

② 四つの救出のいずれにも「苦しみの叫びへの応答」がある

さて、以上のように捕囚民の苦悩が四つの側面からアプローチされ、苦難が立体的に表されてまいりました。これらのどのまとまりにも共通しているのは、「この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から連れ出された」という一文が加えられていることです。民は確かに罪のゆえに苦しみに遭いました。しかし、彼らが「苦しみの地」で叫ぶとき、主は黙って見てはおられず、必ず

助けの御手を差し伸べられるのです。

③ 四つの救出のいずれに対しても「感謝の呼びかけ」がある

主の救いの御業への感謝が毎度呼びかけられています。「**彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ**」という訳文は日本語として不完全ではありますが、贖われた者たちは次の段階へと進むよう導かれていました。それは、自分たちを不思議な御手をもって救ってくださった主を誉め称えること、感謝をささげることです。私たちも祈るとき、願いだけで終わってはなりません。その願いが聞かれたとき、感謝をささげる必要があるのです。

33節以下では、突如として不毛の地に主が命の息吹を吹き込まれる描写が登場します。ここでは、主が思いのままに、荒廃した土地に潤いを与え、肥沃な土地を不毛な土地に変えてしまわれると言われています。「荒廃した土地」とは、バビロンによって徹底的に破壊されたエルサレムを表しているのでしょう。しかし、主はその土地をもう一度復興させ、豊かな稔りを与えることがおできになります。破壊の後に創造がある。新しい創造のためには、古いものは打ち壊される必要があるのです。私たちの古い価値観は、ここでは「荒野」に相当するのかもしれませんが。地上で培ってきた（あるいは押し付けられてきた）生き方は、私たちの中で律法となって、「こうでなければならない」という「決まり」を自らに与えているかもしれません。しかし、主が人の人生に与えておられる生き方とは、もっと自由であるはずです。それは、権力によって決められるものでもない。主が私に何を求めておられるか。そこに集中する人生でありたい。この新しい生き方は、何歳になっても始めることができるのです。

最後に「結論」を読んでおきましょう。

「**知恵のある者はだれか。その者はこれらのことに心を留め、主の恵みを悟れ。**」主がイスラエルの民に解放を与え、彼らがかつて築き上げてきた価値観を根底から覆し、ご自身との自由な関係の内を歩ませられたように、私たちも主との新しい関係のうちに、この人生を構築していきたいと思います。